

外国文化との関係を理解するための 物語教材の開発〔分析編〕

——『源氏物語』桐壺巻と「長恨歌」との読み比べ——

井 実 充 史

1. はじめに（承前）

前稿「外国文化との関係を理解するための物語教材の開発〔单元構想と実践編〕——『源氏物語』桐壺巻と「長恨歌」との読み比べ——」（『言文』69, 2022.3）では、グローバル化が急速に進展している現代において、日本文化と外国文化との関係について理解することがこれまで以上に重要となっているという「学習指導要領」の指摘を踏まえて、『源氏物語』桐壺巻の冒頭より「御局は桐壺なり」まで（以下「光源氏誕生」と呼ぶ）と、それに影響を与えた「長恨歌」の冒頭より「回り看れば血と涙と相和りて流る」までを題材とする読み比べ授業の単元を井実が構想し、大堀真理子が実践した内容を報告した。その詳細は前稿に譲り、以下に両作品の概要と主たる学習活動のみを紹介する。

【長恨歌概要】

美人好きの漢の皇帝（→王）は楊家にいた大変美しい娘（→ヒロイン）を見そめて寵愛した。娘の美しさは後宮のどんな美女も凌いでいた。皇帝はこの娘を迎えて以来、政治を怠るようになった。娘は後宮の全ての美女の寵愛を独占した。娘の一族たちもみな領地をもらって栄華を極めた。このため世間の親は男子よりも女子の誕生を重んずるようになった。皇帝は終日娘を侍らせて歌舞音曲に耽っていた。すると反乱軍が都に攻め上ってきて、皇帝とその軍隊は都から追い出されてしまった。都落ちの途中で皇帝の軍隊は元凶たるこの娘を処刑した。皇帝は彼女を助けることはできず悲嘆に暮れた。

【光源氏誕生概要】

どの帝（→王）の御代であったか、女御や更衣が大勢仕えていた中に、さほど身分は高くないが帝の寵愛を一身に受けるお方（→ヒロイン）がいた。後宮の女性はこのお方を目の敵にした。その恨みが積もったのか、このお方は病気がちになり里下がりも重なるようになった。すると帝は不憫に思ってますます寵愛し、それは宮中の貴族たちも正視できないほどであった。世間の人々も苦々しく思うようになり、楊貴妃の例までも引き合いに出さんばかりであった。このお方の父大納言は亡くなっていたが、母は教養のある人で、他の後宮女性にも引けを取らぬようにこのお方を支えていたが、それでもしっかりした後ろ盾がないので心細く仕えていた。すると前世の契りが深かったのか、美しい男皇子が生まれた。帝は右大臣の女御との間に生まれた第一皇子よりもこの弟皇子を寵愛し、東宮にも立ててしまいそうな様子であった。そのため右大臣の女御も危惧の念を抱くようになった。このお方は帝の寵愛だけを頼みにしていたが、他人からの中傷は激しくなり、本人も病気がちだったので気苦労が絶えなかった。

【主たる学習活動】

○「光源氏誕生」を、語注や辞書・文法書を参考にしながら、人物関係に注意して読解する。

〔知識・技能〕(3) イ

○現代語訳を参考にしながら「長恨歌」を読み、「光源氏誕生」との類似点や相違点について、人物関係に注意して整理する。

〔知識・技能〕(3) ア

○「長恨歌」を踏まえた作者の意図についてまとめる(記述式課題)。

[思考力・判断力・表現力等] A (1) エ実際の授業では、「長恨歌」を踏まえた作者の意図についてまとめる言語活動として、次のような記述式課題を自由記述で実施した。解答用紙に400字詰原稿用紙を用い、枚数は自由とした。

「光源氏誕生」は「長恨歌」を踏まえて書かれている。両者を読み比べて、次の点について考えよう。

(1) 両者の類似点と相違点について。

(2) 紫式部は「長恨歌」の内容をなぜ書き換えたのか。あるいは、書き換えることでどんな展開や効果をねらったのか。

※(2)は自分が紫式部になったつもりで考えてみよう。

本稿では、この記述式課題による74人分の答案を分析することで、この単元構想の成果と課題を明らかにする。授業を実施したのは高等学校普通科3年生の3つのクラスで、8割以上の生徒が4年生大学への進学を希望している。なお生徒の実態についての詳細は前稿を参照のこと。

2. 全体の記述量と完成度について

2.1. 全体の記述量

20字×20行の原稿用紙を配布し、字数制限をもうけず自由に記述させた。記述量は行数を単位とした。3行しか書いていない者から38行も書いている者までいて、記述量にはかなりの差があった。その結果は表1の通り。

平均値は20.2行、中央値、最頻値はともに19行であった。16~20行が31.1%を占め、16行以上は74.3%に達した。このことから、一般的な進学校においては、16行(320字)以上ならおむね記述できることがわかった。また、11行以上が9割を超える一方、10行以下は1割未満であった。10行以下は標準をかなり下回っていると判断できる。ただし、今回は自由記述としたため、適量について考えが及ばずに10行以下しか書かない者が出ってしまった可能性もある。記述量

表1

行数	人数	%	
0~5	2	2.7	平均 20.2%
6~10	5	6.8	中央値 19行
11~15	12	16.2	最頻値 19行
16~20	23	31.1	16行以上 74.3%
21~25	14	18.9	11行以上 90.5%
26~30	11	14.9	10行以下 9.5%
31~35	4	5.4	
36~40	3	4.1	
合計	74	100	

が極端に少ない者を減らすためには、課題提示の際に「10行(200字)を超えること」という条件をつける必要がある。

2.2. 答案が完成している者の割合

答案が完成している者は61人(82.4%)、未完の者は13人(17.6%)であった。未完成者のうち、16行以上記述している者が4人、11~15行が5人、10行以下が4人であった。実際の授業では、意見交換を含めた考察と記述の時間は50分であった。もちろん「光源氏誕生」と「長恨歌」の解説時間は事前にしっかりと取っていた。したがって、16行以上記述しているにもかかわらず完成できなかった者は、おそらく時間調整に失敗したと考えられる。また、11~15行でとどまっている者は記述にやや時間がかかるタイプかもしれない。どちらのタイプも時間内に書き切るように指導することにより、答案を完成させることはできたと思われる。10行以下しか書けなかった者はそもそも書くことが苦手なのではないか。書くことが苦手な生徒には、書く技術の基礎を別途に指導することが望まれる。

3. 類似点・相違点の発見、及び継承・改変の理由や効果の説明について

3.1. 分析方法

自由に記述させたため書き方は多種多様であったが、類似点または相違点をあげた後に継承または改変した理由や効果を述べる（そして、そうしたまとまりをいくつか連ねる）というパターンが比較的多く見られた。ただし、類似点はあげているがそれに対応する理由や効果の説明が抜けていたり、自分では理由や効果を説明しているつもりでも実際はテキストの部分的解釈にとどまっている記述などもあった。この種の必ずしも整理されているとは言えない答案については、筆者が文意をくみ取ったうえで分析の対象とした。

記述式課題は、紫式部が「長恨歌」を下敷きにして「光源氏誕生」を創作したことを前提として、与えられた二つのテキストから類似点及び相違点を読み取り、類似点については「長恨歌」からその表現や内容を継承した理由や効果を、また、相違点についてはその表現や内容を改変した理由や効果を考察してまとめるというものである。したがって、全員の答案(74人分)を対象に、「類似点」、「相違点」、「長恨歌」から継承した理由や効果、「長恨歌」を改変した理由や効果」という4つの観点に沿って、それぞれの記述内容を細かく分類した。その際、誤読や知識不足による誤解であると明確に判断できる記述は分類の対象から除き、「誤読等を含む記述」として別途まとめて分析した。

結論を先取りすることになるが、具体的に説明すれば、「類似点」として生徒が取り上げている内容（「誤読等を含む記述」は除く）は、おおよそ①王がヒロインを過度に寵愛する、②ストーリーの大枠を継承する、③身分差のある男女の恋愛を語る、④世間が王の過度な寵愛を批判する、⑤王が政治を怠る、⑥幸福から不幸へと展開する、⑦男女の恋愛をテーマとする、⑧ヒロインが美しい、⑨王が好色であるの9カテゴリーに分類できた。他の3つの観点についても同様の

分類とカテゴリー化を行い、それぞれについて量的・質的観点から分析した。

3.2. 量的分析

ここでは、二つのテキストの類似点と相違点についてどのくらい気づいているか（発見件数）、また、紫式部が継承もしくは改変した理由や効果についてどのくらい書いているか（言及件数）について量的に分析する。分析の進め方は、最初に類似点または相違点のどちらかについて何件くらい発見または言及できているかを総合的に分析し、次に類似点と相違点のそれぞれについて個別に分析する。

3.2.1 類似点または相違点の発見件数

類似点または相違点の発見件数別の人数について、結果は表2の通りである。

平均値は3.6件、中央値は4件、最頻値は5件であった。平均値・中央値・最頻値を標準的な発見件数とすれば3~5件とやや幅をもった数字になる。この点についてさらに分析すると、3件以上が7割弱(68.9%)を占めていることから標準の最低値は3件と考えられる。一方、上位層については、5件以上が約3割を占めるものの6件以上が2割を大幅に割り込んでいることから、5件をもって標準の最高値とするのが妥当であろう。

表2

件数	人数	%	
0	5	6.8	平均値 3.6件
1	5	6.8	中央値 4件
2	13	17.6	最頻値 5件 (18.9%)
3	13	17.6	
4	13	17.6	
5	14	18.9	
6	9	12.2	
7	1	1.4	
9	1	1.4	
合計	74	100	

以上のことから、類似点または相違点の標準的な発見件数は3~5件であると考える。もちろん、いずれも妥当な内容を書いていることが前提である。

3.2.2 継承または改変の理由や効果についての言及件数

継承・改変の理由・効果の言及件数別の人数について、結果は表3の通りである。

平均値は2.1件、中央値、最頻値はともに2件であった。よって、継承または改変の理由や効果についての標準的な言及件数は2件である。

以上をまとめれば、類似点または相違点を3~5件発見して、継承または改変の理由や効果を2つ記述するというのが、一般的な進学校3年生の標準的なあり方であると言えよう。

次は類似点と相違点のそれぞれについて個別に分析する。

3.2.3 類似点の発見件数

類似点の発見件数についての結果は表4の通り。

類似点を記述していない者（記述しているが内容に誤りがある者を含む）が37人（50.0%）とちょうど半数である。これは後述のように相違点を記述していない者が全体の1割程度にとどまっているのとおおきな隔りがある。鍵となる語句の引用や言及、状況設定、展開や構成、人物関係、話型などいくつかのレベルで類似点を見出すことは可能であるはずだが、両作品間の類似性について

表3

件数	人数	%	平均値 2.0件
0	11	14.9	中央値 2件
1	14	18.9	
2	25	33.8	
3	12	16.2	
4	10	13.5	
5	2	2.7	
計	74	100	

表4

件数	人数	%	平均値 0.8件
0	37	50.0	中央値 0.5件（中央値は0と1）
1	24	32.4	2件以上 13件（17.6%）
2	9	12.2	
3	2	2.7	
4~	2	2.7	
計	74	100	

はあまり意識が向いていなかったようである。今回は「光源氏誕生」が「長恨歌」を踏まえて書かれていることを前提に比較することを課題としたため、両者が似ていることは言わずもがなと考える生徒がいたのかもしれない。しかし、類似点の発見は、作者が先行作品のどこをどういう意図で継承したのかに関わる重要な問題である。こうした問題について生徒がきちんと意識できるよう支援していくことは今後の課題となろう。両作品の違いばかりに目を向けず、似ているところについても探そう声かけをすることが望ましい。

3.2.4 継承の理由や効果についての言及件数

継承の理由や効果についての言及件数の結果は表5の通り。

言及できなかった者（誤った言及をしている者を含む）が6割にのぼるといひどい結果となった。この原因はひとえに発問のまずさにある。「紫式部が「長恨歌」を下書きにして書き換えながら「光源氏誕生」を作成したのはなぜか。その効果を考えながら、根拠を明確にして説明せよ。」という問いかけでは、継承の理由や効果について意

表5

件数	人数	%	平均値 0.5件
0	45	60.8	中央値 0件
1	22	29.7	1件以上 29人（39.2%）
2	7	9.5	
計	74	100	

識が向くことはないだろう。単元構想した者としては大いに反省しなければならない。発問は継承にも意識が向くように「紫式部は「長恨歌」の内容をなぜ受け継いだり書き換えたりしたのか。受け継いだり書き換えたりすることで、どんな展開や効果をねらったのか。」とするべきであった。発問の変更にともない、[思考・判断・表現]①の「他の作品との関係を踏まえながら古典を読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察している」状況（前稿参照）を、「光源氏誕生」の創造性について、作者が「長恨歌」の内容をなぜ受け継いだり書き換えたりしたのか、あるいは、受け継いだり書き換えたりすることでどんな展開や効果をねらったのかという観点から自分の考えを説明している」こと（「おおむね満足できる」状況（B））と捉え、判断の規準も以下のように変更したい。^{*1}

A 評価：類似点と相違点をどちらも指摘したうえで、継承及び改変した理由や効果について妥当性のある考えを述べている。

B 評価：類似点または相違点をどちらか指摘したうえで、継承または改変した理由や効果について妥当性のある考えを述べている。

C 評価：継承または改変した理由や効果について妥当性のある考えを述べていない。

※「妥当性」の有無の判断については、3.3. 質的分析において具体的に詳述する。

このような欠陥発問にも関わらず、29人（39.2%）もの生徒が継承の理由や効果について言及していたことは驚きであった。授業実践者及び生徒たちに感謝する。

さて、今回の採点結果はさておき、一般論として言えば、先行テキストを引用したり、暗示したり、模倣したり、翻案したり、取り入れたりするのは文学的創造における主要な技法であるとともに、伝統の継承——敬意を込めて受け継ぐ場合だけでなく、アイロニーやパロディなど批判的に取り入れる場合も含む——はあらゆる創造的営為において不可欠の要素である。先行作品との類似点を見つけて受容状況を確認させたうえで、それ

を取り入れた作者の意図やその効果などについて考える習慣は身につけさせたい。

3.3.1 相違点の発見件数

相違点の発見件数についての結果は表6の通り。

相違点を発見した数の平均は2.8件、中央値は3件、最頻値は2件で、類似点発見件数の平均0.5件、中央値0件、最頻値0件を全てにおいて2件分上回っている。相違点の発見の方が相対的に取り組みやすかったのであろう。こちらは生徒が自発的に取り組める課題であったと言える。

発見件数6件以上は5人、なかには10件も見つけ出している生徒もいる。しかし、ただ相違点をたくさんあげればよいというものではない。問題はその内容である。そこで、改変の理由や効果に関するこれら5人の記述内容を分析すると、掲げた相違点の半分が改変の理由や効果に結び付けられていない者が一人いたけれども、それ以外は掲げた相違点のすべてを改変の理由・効果の根拠に用いて記述していた。相違点と改変の理由や効果についてセットで記述するようきちんと指導されていたことの証であろう。

3.3.2 改変の理由や効果についての言及件数

改変の理由や効果についての言及件数の結果は表7の通り。

改変の理由や効果についての言及件数の平均値

表6

件数	人数	%	平均値 2.8件
0	9	12.2	中央値 3件
1	12	16.2	最頻値 2件
2	14	18.9	5件以上 14人（18.9%）
3	13	17.6	
4	12	16.2	
5	8	10.8	
6	5	6.8	
10	1	1.4	
計	74	100	

表7

件数	人数	%	平均値
0	13	17.6	1.5件
1	34	45.9	中央値 1件
2	10	13.5	最頻値 1件
3	9	12.2	1件以上 62人 (83.8%)
4	7	9.5	2件以上 27人 (36.5%)
5	1	1.4	3件以上 19人 (25.7%)
計	74	100	4件以上 8人 (10.8%)

は1.5件、中央値と最頻値は1件であった。相違点の発見件数に比べて値が低いのは、理由や効果の説明に誤りのある記述を計上していないことにもよるが、最大の理由は相違点を複数まとめて根拠としたうえで変更の理由や効果を述べている答案が多いからである。実際、相違点の発見総数208件のうち変更の理由・効果の根拠に用いられている記述は195件、変更の理由や効果についての言及件数は116件で、おおよそ相違点を二つあげて変更の理由や効果の一つ述べているという計算になる。自己の見解を主張するために複数の根拠を示しているのだから、よい結果と言えるだろう。

なお、変更の理由や効果について記述していない者が12人いた。そのうち採点不能の3人と、類似点と継承の理由や効果の方ではきちんと記述している者1人を除く8人は、歴史的知識の不足、説明不足、比較対象が不適切など記述内容になんらかの問題を抱える答案であり、そのうちの6人は未完成であった。おそらくは考え過ぎて時間配分がうまくできなかったであろう。解答の際に時間配分を考慮するよう指導することの重要性を改めて認識した。理由や効果の記述内容に問題のある答案については、次の質的分析において詳述する。

3.4. 質的分析

前節では個人別に発見件数や言及件数などを量的観点から分析し、比べ読みの成果についての標準的なあり方や指導上の課題について明らかにした。本節では74人分の記述内容全体を分類してカテゴリー化し、そのカテゴリーに即して詳細に分析する。

3.4.1 類似点の内容分析

類似点の発見件数は延べ57件（誤解や説明不足など記述内容に問題がある場合は除く）で、その内容の内訳は表8の通りである。なお、一人で複数の内容を記述している者は12人いて、中に

表8

記述内容の要旨	カテゴリー	人数
①王がヒロインを過度に寵愛する	〔過度の寵愛〕	15
②ストーリーの大枠を継承する	〔大枠の継承〕	14
③身分差のある男女の恋愛を語る	〔身分差の恋〕	7
④世間が王の過度な寵愛を批判する	〔世間の批判〕	6
⑤王が政治を怠る	〔政治的怠慢〕	5
⑥幸福から不幸へと展開する	〔不幸な結末〕	3
⑦男女の恋愛をテーマとする	〔男女の恋〕	3
⑧ヒロインの美貌を描く	〔美貌〕	3
⑨王が好色である	〔好色〕	1

は5件記述している者もいた。

〔大杵の継承〕が第1位とならなかったのは、授業計画の段階で〔大杵の継承〕を比べ読みの前提事項として取り扱っていたため、生徒がいわずもがなと考えた可能性が高い。しかし、「光源氏誕生」が「長恨歌」をどの程度継承しているのか——大杵の継承なのか、部分の継承なのか——についての確認は、比較作業をする際の重要な観点である。比較作業の観点の一つとして、受容側が先行作品をどの程度継承しているのかについて確認することを組み込んだ授業計画を立てるべきであった。

〔過度の寵愛〕、〔世間の批判〕、〔政治的怠慢〕は、王の色好み（王には多くの妻をもち世継ぎ候補者をたくさん儲けることが求められる）がもたらす世継ぎ候補者間の王位継承争いに深く関わるカテゴリーであり、『源氏物語』を王権物語として読解していくことにつながる重要な気づきである。それに対して、〔身分差の恋〕や〔男女の恋〕は、シンデレラ・ストーリーのような大まかな話型レベルでしか類似点が把握できておらず、「長恨歌」と比較して導き出した成果としてはやや物足りない。しかし、話型の抽出は物語を構造的に捉えていく第一歩でもあるので、やはり一定の評価はすべきであろう。とはいえ、『源氏物語』に限らず王朝物語の多くは、たんなる恋愛物語ではなく、背後に政治的権力闘争を孕んだ物語である。たんなる恋愛物語としてしか捉えられていない生徒に

対しては、天子（皇帝）や帝（天皇）など「王」という存在が、古代においては支配階級の頂点に君臨し国家の権威を体現していたことなどを繰り返して説明することが望ましい。

なお、〔身分差の恋〕、〔世間の批判〕、〔政治的怠慢〕、〔美貌〕、〔好色〕、〔不幸な結末〕の6点については、相違点においてそれと対立する見解が出されており、解釈上の争点となっている。この点は後の相違点のところで述べる。

3.4.2 継承の理由や効果についての内容分析

継承の理由や効果についての言及件数は延べ36件（誤解や説明不足など記述内容に問題がある場合を除く）で、その内容の内訳は表9の通りである。

物語作者が先行作品を下敷きにすることの最大のねらいが〔展開を予想〕と〔わかりやすさ〕にあることは間違いない。多くの生徒がこの点に気づいているのはこの授業の大きな成果である。とくに〔わかりやすさ〕については、ストーリーが似ていて内容が追いやすくなるという単純な理由だけでなく、桐壺帝の桐壺更衣への愛情の深さを玄宗と楊貴妃の例を引くことでわかりやすくするなど具体的な人間関係に基づいて説明している答案もあった。〔作者の好み〕については間違っているとは言えないが、継承の理由を作者の嗜好に解消して済ますだけでは不十分であろう。このような解答を見かけたら、どこをどう継承し変えているのか、また、その動機やねらいは何かなど

表9

記述内容の要旨	カテゴリー	人数
①先行作品を読者に想起させて今後の展開を予想させるため	〔展開を予想〕	11
②有名作品を下敷きすることで内容をわかりやすくするため	〔わかりやすさ〕	7
③相違点及び改変の理由や効果と関連付けて記述している	〔相違と関連〕	7
④作者が長恨歌を好んでいて、同じテーマの物語を書きたかったから	〔作者の好み〕	5
⑤王の過度な寵愛は政治的混乱を招くなどの教訓を示すため	〔教訓を示す〕	4
⑥その他	〔その他〕	2

の問いかけを追加して、より深く考えるように促したい。〔教訓を示す〕*2は、今を生きるための教訓として先例を引くというもので、古典ではよく用いられる手法である。こうした古典の常套手法を知ることは重要であるので、全体で共有しておきたいところである。

〔その他〕として、「作者が中国文学に対する自分の教養を主人にアピールするため」、「身分差のある日・中の恋愛物語を書くことで、身分の低い者でも王の寵愛を受ける可能性があることを示すため」がそれぞれ1名であった。いずれもその根拠をテキストに見出すことは困難であり深読みし過ぎて感否めない。が、文意を肯定的に読み取って読めば、先行作品を引用することの行為遂行的側面を直観的に捉えているようにも見受けられる。必ずしも誤解とは決めつけられないユ

ニークな見解と言えよう。

なお、〔相違と関連〕については、相違点とともに改変の理由や効果へと収斂していく書き方であるので説明は省略する。

3.4.3 相違点の内容分析

相違点の発見件数は延べ207件（誤解や説明不足など記述内容に問題がある場合は除く）で、その内容の内訳は表10の通りである。

このうち〔身分を下げる〕、〔美貌削除〕、〔世間の批判追加〕、〔政治的怠慢削除〕、〔好色削除〕、〔幸福な結末へ〕の6点については、それぞれ3.3.1で示した〔身分差の恋〕、〔共に美貌〕、〔世間の批判〕、〔政治的怠慢〕、〔好色〕、〔不幸な結末〕を類似点とする答案と解釈が対立している。両者の争点を整理すれば以下の通り。

a) 楊貴妃も桐壺更衣もともに身分が低いのか

表10

記述内容の要旨	カテゴリー	人数
①ヒロインが処刑されない	〔処刑削除〕	28
②ヒロインの子が誕生する	〔子の誕生追加〕	27
③反乱は起こらない	〔反乱削除〕	23
④後宮女性がヒロインを恨む	〔怨恨追加〕	23
⑤ヒロインの身分が低い	〔身分を下げる〕	16
⑥ヒロインが病弱に描かれる	〔病弱追加〕	16
⑦ヒロインの後見人（父親）が死ぬ	〔後見人の死〕	13
⑧ヒロインの美貌を描かない	〔美貌削除〕	13
⑨王の過度の寵愛を世間が批判する	〔世間の批判追加〕	12
⑩王の政治的怠慢が描かれない	〔政治的怠慢削除〕	11
⑪不幸な結末を幸福な結末に変える	〔幸福な結末へ〕	8
⑫王のヒロインへの寵愛が原因で世間が女子の誕生を重視するようになったことを描かない	〔女子重視削除〕	6
⑬ヒロインの好敵手（弘徽殿女御）が登場する	〔好敵手追加〕	5
⑭王の好色は描かれない	〔好色削除〕	2
⑮王がヒロインの子をも寵愛する	〔子の寵愛追加〕	2
⑯その他	〔その他〕	2

〔共に身分差の恋〕、楊貴妃は身分が高く桐壺更衣は身分が低いのか〔身分を下げる〕？

- b) 楊貴妃・桐壺更衣ともに美人として描かれているのか〔共に美貌〕、楊貴妃は美人として描かれているが桐壺更衣はそうではないのか〔美貌削除〕？
- c) どちらの作品も王の過度な寵愛が世間から批判されているのか〔共に世間は批判〕、「光源氏誕生」のみ世間から批判されているのか〔世間の批判追加〕？
- d) どちらの作品も王の政治的怠慢が描かれているのか〔共に政治的怠慢〕、「光源氏誕生」では王の政治的怠慢が削除されたのか〔政治的怠慢削除〕？
- e) どちらの作品も王は好色なのか〔共に好色〕、「光源氏誕生」では王の好色は削除されたのか〔好色削除〕？
- f) 「光源氏誕生」は不幸な結末なのか、幸福な結末なのか？

a) については、楊貴妃の父楊玄琰が蜀地方の下級役人だった^{*3}一方で、桐壺更衣の父は公卿の中納言であるから、歴史的事実としては楊貴妃の方が身分的に低かったと言える。だが、歴史的事実をここで持ち出すことは虚構の物語を読み味わう上であまり意味はない。むしろ「長恨歌」本文に即して丁寧²に解釈するべきであろう。ヒロインは楊貴妃ではなくただ「楊家に女有り」として登場する^{*4}。また、「姉妹弟兄皆土を列ねたり」や「光彩門戸に生ずるを」のように、楊家が寵愛を受けた一族の女のおかげで成り上がっていったことが語られる。それに対して、「光源氏誕生」の「いとやんごとなき際にはあらぬ」は桐壺更衣の相対的地位の低さを明示している。このように両作品の本文を丁寧にたどっていけば、いずれの作品も低い身分の女性が王に寵愛されるという枠組みで書かれていると理解できるだろう。身分が低い（というのが言い過ぎだとすれば、高くない）にも関わらず王に寵愛されるというヒロイン像を、紫式部は「長恨歌」から継承したと考えるべきだろう。したがって、楊貴妃も桐壺更衣もとも

に身分が低いとする解釈〔共に身分差の恋〕を正解とする。

b) については、「光源氏誕生」との差異が意図的なものであると気づいてほしいところだ。楊貴妃の美貌描写はあまりにも露骨である。それに比して桐壺更衣の容姿はまったく描かれない。両者の差は明らかである。美貌ゆえに寵愛されるという「長恨歌」のヒロイン像をあえて避けることで、その内面に焦点をあてたと考えるのが妥当である。したがって、楊貴妃は美人として描かれているが桐壺更衣はそうではないとする解釈〔美貌削除〕を正解とする。

c) について、「遂に天下¹の父母の心を令て、男を生むことを重んぜずして女を生むことを重んぜしむ」（長恨歌）と「唐土にもかかることの起こりにこそ、世の乱れもあしかりけれと、やうやう天下²にもあぢきなう人のもてなやみ種に成りて、楊貴妃のためしも引き出つべくなり行く」（光源氏誕生）に共通する「天（の）下」に着目すれば、両者の対応関係にも気づけるだろう。「長恨歌」では「天下の父母（＝世間）」が楊貴妃を過度に寵愛する皇帝に同調している一方で、「光源氏誕生」では「天下」の人々（＝世間）がこの楊貴妃の例を出して帝を批判している。王の寵愛に対する世間の反応について作者が意図的に書き換えていることは明らかだろう^{*5}。したがって、「光源氏誕生」のみ王が世間から批判されているとする解釈〔世間の批判追加〕を正解とする。ただし、この違いは「長恨歌」の現代語訳を読んでいるだけでは発見が困難であろう。指導者による適切な助言が必要である。

d) について、「光源氏誕生」本文を丁寧に読めば、帝の政治的怠慢が書かれていないことは明らかである。むしろそこはあえて不問に付し、「唐土にもかかることの起こりにこそ、世の乱れもあしかりけれ」と「長恨歌」が描く悲劇を引き合いにだし、やがて唐土でおこった混乱が本朝でも起こるのではないかと世間が危惧するさまを強調している。王の政治的怠慢を削除したというより、そういうことが起こりうる可能性をあおり立てる

内容に置き換えたと言った方が適切かもしれない。これにより作者は、桐壺更衣への寵愛が安史の乱のような政治的大混乱につながる危険性を示唆し、読者が戦慄的な展開を予想するように仕向けているのである。したがって、「光源氏誕生」では王の政治的怠慢が削除されたとする解釈〔政治的怠慢削除〕を正解とする。

e) について、「長恨歌」は「漢皇色を重んじて傾国を思ふ」の如く王の好色性を明示する一方で、「光源氏誕生」にそうした内容は書かれていない。したがって、「光源氏誕生」では王の好色は削除されたとする解釈〔好色削除〕を正解とする。しかし、帝の一夫多妻状態は現代からみればあきらかに好色的であり、歴史的背景を知らなければ非道徳的であると誤解してしまうだろう。この種の誤解を避けるためには、王朝貴族特有の婚姻形態を背景的知識として事前に指導しておくことが望まれる。

f) について、桐壺更衣は後宮女性の迫害を受けて病となり宮中から退出して死去することからすれば、ヒロインが死ぬという「長恨歌」のストーリーを「光源氏誕生」も踏襲したとみるべきである。しかし、本授業で取り上げた範囲は光源氏の誕生までであるので、生徒はその後の展開を知らない。この限られた情報のなかで子どもの誕生がヒロインに幸福をもたらしたと読んだとしてもやむを得ぬところがある。事実、物語の主人公の誕生自体は喜ばしいことであろう。物語の一部しか取り上げられない授業ではこうした誤解は不可避である。したがって、結末が幸福か不幸かについてはどちらの解釈も許容する。こうした情報量不足による誤解が生じる場合には、その都度適切な情報を追加して再考させるほかはあるまい。

以上のように、a) ~f) の意見対立は、情報量不足を要因とする f) を除くと、誤読もしくは歴史的背景に関する知識不足から生じたものであった。しかし、争点として浮き彫りになったおかげで、高校生が誤解しやすいところが具体的にあぶり出された。このように比較作業を通して生徒から出された見解の相違については、必要な情報を

適宜提示するなどして論理的な解決に導く手だてを取ることで、教室での議論のさらなる活性化を促進することができるだろう。

〔その他〕では「王の寵愛に対して楊貴妃は能動的だが桐壺更衣は受動的である」、「光源氏誕生では前世の契りに言及する」などの鋭い指摘も見られた。前者はヒロインの人物像を豊かに捉えるのに役立つ発見であり、後者は物語の展開上の効果を捉えるのに役立つ発見である。

3.4.4 変更の理由や効果についての内容分析

変更の理由や効果についての言及件数は延べ114件（誤解や説明不足など記述内容に問題がある場合を除く）で、その内容の内訳は表11の通りである。

〔翻案効果〕、〔同情・共感〕、〔続きを期待〕は、物語は読者を意識して書かれるものとの理解——読者論的理解——を示した考察である。一般的に、現代の高校生にとって王朝物語の世界は遠い存在であると思われるが、そこに〔同情・共感〕や〔続きを期待〕という考え方ができたのは、おそらく自分自身と「長恨歌」及び「光源氏誕生」との距離感——漢文化と和文化との距離感と一般化して言い換えてもよい——を測定したからであろう。現代の高校生が「長恨歌」よりは「光源氏誕生」の方が自分に近いと感じたことが根底にあり、その実感を平安朝の読者にまで及ぼした結果、作者が当時の読者に配慮していたことに気づいたのではないか。つまり、外国文学との比較を通して日本古典文学の相対的な近さを実感することができたのである。さらに〔同情・共感〕については、“ヒロインの身分をあえて低く設定して後宮女性の嫉妬を買うように書き換えることで、身分の低い女性読者の共感を誘っている。との見解を示す者が3人いた。これは「王とヒロインの身分差を強調して物語を純愛化する〔物語の純愛化〕」という解釈の延長上に、そうした受け止め方をしやすい読者は女性ではないかとその性差にまで視野を広げて考察したものと考えられる*6。もちろん、歴史的事実として楊氏は権門ではないし、また、大納言クラスの娘と『源氏物語』の読

表 11

記述内容の要旨	カテゴリー	人数
①ヒロインを弱者とすることで読者の同情や共感を誘う	〔同情・共感〕	20
②ヒロインや王の人物像に奥行きをもたせる	〔人物の奥行き〕	19
③戦争や処刑の場면을削除して残酷さを緩和する	〔残酷さの緩和〕	13
④舞台を日本風書き換えることで読者に親近感や現実感をもたらし	〔翻案効果〕	12
⑤ヒロインのライバルや子が登場することで読者に続きを期待させる	〔続きを期待〕	11
⑥登場人物を増やし人間関係を複雑にして面白くする	〔関係の複雑化〕	8
⑦王の政治的怠慢や軍事的反乱の場면을削除して天皇のイメージを保持する	〔天皇像の保持〕	6
⑧作者の好みによって書き換えた	〔作者の好み〕	6
⑨王とヒロインの身分差を強調して物語を純愛化する	〔物語の純愛化〕	4
⑩オリジナリティを出したかった	〔独自性〕	4
⑪中国の悪例を取り上げ、王の過度な寵愛は日本でも何らかの政治的混乱を招くという戒めを示す	〔悪例の戒め〕	3
⑫その他	〔その他〕	8

者層との身分が一致するとは言えないので、学術的な突き詰め方には甘さが残る。しかし、ヒロインの身分に特に言及しない「長恨歌」に比べて、「光源氏誕生」がヒロインの身分を相対的に低く設定しているのは事実であり、そこに着目して物語が書かれた時代の読者を想定し、その性別と階層にまで考察を及ぼすこと自体は間違っていない。こうした深い考察ができたのは比較の成果である。

〔人物の奥行き〕は人物像型についての作者の創意工夫を、〔関係の複雑化〕は人物関係についての作者の創意工夫を、「長恨歌」との比較を通してそれぞれ具体的に発見したものである。「長恨歌」「光源氏誕生」とも王とヒロインの悲恋という同じ人間関係の枠組みで書かれてあるので、人物の性格や相互関係の相違点を探し出すことは容易であろう。それに、人物像や人物関係の把握

は、『学習指導要領』C読むこと「構造と内容の把握」において小学校から繰り返し学習しており、高校生にとっては十分に習熟している読解方略でもある。それを古典テキストに応用するだけで事は足りる。つまり、もっとも考えやすい内容であると言えよう。もし考察に行き詰まっている生徒がいたら〔人物の奥行き〕または〔関係の複雑化〕に目を向けるよう支援すればよいと考える。具体的には、まず人物像や人物関係の相違点を探させ、次になぜ「光源氏誕生」の作者が改変したのかを考えるよう助言するのである。習熟している方略を適用するだけであるから、生徒が自力で人物の造型の仕方や人間関係の作り方の創意工夫について考察を及ぼす可能性は高いと思われる。

〔残酷さの緩和〕、〔天皇のイメージ保持〕、〔悪例による戒め〕は外国との文化的相違性を示した見解であるが、自国優位の考え方が背景にありは

しないかとやや気になるところである。〔残酷さの緩和〕と〔悪例による戒め〕は外国文化に対する否定的態度が大なり小なり表れていると言わざるを得ない。また〔天皇のイメージ保持〕については、現代の天皇制のイメージに囚われているところが大きいのではないか。天皇制についても歴史的に捉えることが不可欠である。一般的に、外国文化と自国文化を比べる際にある種のナショナリズムが表出してしまう恐れはつきまとう。しかし、このこと自体は決して悪いことではない。むしろこれを契機として、自身の内側にナショナリズムが隠れ住んでいることをきちんと自覚すればよいと考える。もちろん、生徒が自覚できるようフォローをするのは指導者の務めである。

〔その他〕には、「ヒロインが病弱であったり後見人が死んだりすることで悲惨な感じを強調する」、「反乱場面を削除したのは、主家である道長政権の没落を暗示するので避けた」、「王の過度な寵愛をめぐる中国と日本の宮中や世間における対応の違いを書くことで、両国の考え方の違いを読者に伝えようとした」、「美貌をもたない女性でも王の子を産むことで王の気持ちを引きつけ、女の魅力をだせることを知ってもらいたい」などが見られた。それぞれ解答類型に収まらない見解を示している頼もしいかぎりだが、とりわけユニークだったのは、「前の世にも御契りや深かりけん」を玄宗と楊貴妃の契りととらえ、「光源氏誕生」は玄宗と楊貴妃の転生物語、すなわち「長恨歌」の続きの物語として構想されたとする見解である（3人が同様の見解を示したが、いずれも同じグループであったと推測される）。輪廻転生という仏教思想に思い至ったのもさることながら、輪廻転生と前世の契りとを結び付けて作者の構想の方法にまで考察を深めているところには驚かされた*7。

以上、相違点にもとづくこれらの考察はいずれも「長恨歌」との読み比べの成果であり、「光源氏誕生」を単独で読むだけでは得がたい解釈の深化が行われた事実を示すものとする。なお、〔作者の好み〕が改変の理由や効果として不十分であるのは、継承の場合と同様である。また、たんに

オリジナリティが出したかったと述べる〔独自性〕も、なんら理由や効果の具体的な説明になっていないことは言うまでもない。これらの記述については再考を求めるべきであろう。

3.4.5 誤読等を含む記述についての分析

ここまでの分析の対象は内容に誤読等が認められない記述であった。本節では、誤読や知識不足による誤解であると明確に判断できて分析の対象から外した記述について検討する。採点不能な答案3人分を除く71人のうち、誤読等を含む記述をしている者は23人（32.4%）であった。約3分の1弱の者が何らかの誤読や誤解を含んだ記述をしていたのである。このなかには複数の誤読等を記述している答案も混じっている。それらを1件ずつ数えると、誤読等を含む記述は全部で31件だった。その内容の内訳は表12の通り。

①〔理由効果なし〕はたんなる出題意図の理解不足とみてよい。これについては、類似点・相違点とその理由・効果はセットで記述すべき旨を徹底して指導すればすぐに改善されるだろう。ちなみに〔理由効果なし〕の件数は最大であるが、個人別に見ると別の観点から何らかの意味ある記述（採点の際に得点を与えられる記述）をしている答案がほとんどであった。おそらくは、類似点・相違点を複数出したけれども、その全てについて効果や理由を書くことができなかった（あるいは書く時間がなかった）だけと思われる。

②〔説明力不足〕について代表的な事例を以下に示す。なお、事例文は井実が要約したものである。また〈 〉内に何が問題なのかについてのコメントを付した。

○「長恨歌」を参考として、その当時の政治やその当時特有のルールを未来に伝えたかった。

〈当時の政治やルールとは具体的に何を指すのか、それを伝える目的は何か、「長恨歌」のどこがそれに該当するのかなど、書くべきことを書いていない。全面的な修正が求められるケースである。説明するとはどういうことか、という基礎の習得が求められる。〉

表 12

問題点のある記述内容の要旨	カテゴリー	人数
①類似点・相違点を示しているが、継承・改変した理由・効果の記述が無い	〔理由効果なし〕	11
②継承・改変した理由・効果の説明が不十分である	〔説明力不足〕	7
③作品の歴史的背景や文学史的背景に関する知識が不足している	〔背景知識不足〕	6
④比較対象が示されない、または不適切である	〔比較不適切〕	4
⑤本文解釈上の誤解がみられる	〔誤読〕	2
⑥答案の主旨がはっきりしない	〔主旨不明〕	1

○後宮女性の恨みや世間の批判を書き加えることで、王のヒロインへの寵愛をわかりやすくした。

〈王の性格、すなわち愛情の深さについて述べたいのだろうが、「寵愛をわかりやすくする」はいかんせん言葉が拙い。「困難な状況にあってもヒロインを愛する王の愛情の深さを強調する」など、説明するのにふさわしい語彙の習得が求められる。〉

○ヒロインの境遇を似せつつ、処刑場面を削除することで性格の違いを出す。

〈新たなヒロイン像の創出について述べようとしていると思われるが、性格の違いについて具体的な説明を欠いている。具体的に説明する能力の習得が求められる。さらに、新たな人物像を創出した作者の意図まで書ければなおよい。〉

○好色を排除しヒロインを一途に思う王を描くことで、日本の品の良い純粋な男性を書きたかった。

〈天皇は男性一般とは異なる存在である。おそらくは日中における王の人物像の違いについて述べたかったのだろう。その場合、「男性」ではなく「王」と書いていれば、日本の王のイメージを保持するためという見解として許容できる。つまり説明する際の用語の選択が

不適切なのである。適切な用語を選択する能力の習得が求められる。ただし、用語の使い分けはケースバイケースであり、1回の授業で用語の選択能力を一括して指導することは困難である。論じる対象によって臨機応変に対処していくを地道に習得していくほかはあるまい。たとえば評論の授業において用語に注意を払うよう指導するなど、国語の全授業を通した総合的な指導が求められる。〉

③〔背景知識不足〕について代表的な事例を示す。

○反乱・処刑の場面を後宮女性内の争いを書き換えたのは、この時代は争いも多く戦いが身近にあるので、貴族の権力闘争と後宮女性同士の複雑な人間関係は新鮮であったから。〈作品の成立時期を中世の武家の時代と勘違いしているか。資料集や古語辞典の附録で確認するなど、作品の歴史的背景に関する事項を調べる能力の習得が求められる。〉

○恋愛や身分関係をメインとする「長恨歌」に基づいて、宮中の人間関係の様子を庶民に伝える。

〈「長恨歌」や『源氏物語』が庶民にも読まれていたというのは、作品の受容状況についての誤解である。どういう読者を対象に作品が書かれたか（読者論の観点）について考察す

るにあたっては、いわゆる作品の成立背景とは異なる知識が求められる。作品の歴史的背景に関する事項にはその受容状況も含まれることを確認したい。

○王と低い身分の女との恋愛物語を下敷きにしたのは、同様の物語が日本になかったから。〈落窪物語など身分差のある男女の物語は先行して存在する。ただし、高校生にそこまで細かい文学的知識を求めるのは無理であろう。この種の専門的な知識はこうした機会を通してその都度適切に指導するしかないだろう。〉

④〔比較不適切〕について代表的な事例を示す。

○男子よりも女子の誕生が好まれたという要素(=世間の女子重視)を削除することで、男皇子(=光源氏)誕生の素晴らしさを強調する。〈世間の女子重視は妃候補となる女子が重宝されたということであり、妃と王との間に男の王子が誕生したこととは無関係である。よって、世間が女子の誕生を重視したことと光源氏が誕生したことは比較の対象にならない。こうした誤解は、話の構成や人物関係などを構造的に把握・整理することで防げるだろう。〉

○天子が楊貴妃だけを愛する悲劇的恋愛物語から光源氏が多くの女性と関わりながら栄華を極める物語へと書き換えた。〈〈玄宗—楊貴妃〉と〈桐壺帝—桐壺更衣〉が〈王—ヒロイン〉の関係にあることを理解していないために、比較対象とはならない玄宗と光源氏とを対比的に扱ってしまったのであろう。これも登場人物の相関関係についての誤読を原因とする不適切な比較である。ただし、この答案の場合は、『源氏物語』のあらすじに関する知識がかえって比較考察の邪魔をしているようにも思われる。テキスト外情報を一端遮断してテキストを愚直に読むことから始めるよう改めて指導したい。〉

⑤〔誤読〕について代表的な事例を示す。

○楊貴妃は恋愛に夢中になって政事を怠ったが桐壺更衣は行事に参加していたと書き換えることで、恋愛中であっても政事・行事は行うべきとの教訓を伝える。

〈政事を怠ったのは天子である。今回、この種の単純な誤読はあまり見られなかった。授業担当者の丁寧な指導のたまものであろう。通常、この種の誤読はもう少し頻出すると思われる。〉

⑥〔主旨不明〕の答案を示す。

○王がヒロインを過度に寵愛したら世間が女子を重視したという内容を、世間が王の過度な寵愛を批判したと書き換えたのは、作者が「長恨歌」を読んだ時そのように感じたから。〈「長恨歌」に描かれた女子重視の場面に対して紫式部が異なった理解を示した(紫式部が「長恨歌」を誤読していた?)ということか。主旨が伝わるよう全面的に書き換えることが求められる答案である。この種の「難解」な答案への対処は難しいが、他人が読んでもわかるように自分の答案を見直す時間を設けることができれば、あるいは減らすことができるかもしれない。たとえば、グループでの意見交流で互いの答案のわかりやすさを相互チェックするなどの活動は有益であろう。〉

4. 結 論

以上、「光源氏誕生」と「長恨歌」の比べ読み授業で得られた自由記述式による生徒(一般的な進学校の3年生)の答案を文章量及び記述内容の観点から分析することで、日本文化と外国文化との関係を理解するために必要な教材や指導内容、指導方法のあり方を探究してきた。分析結果からわかった個々の成果や課題は下線を引いて示したので、ここでは一般論として通用しそうな内容のみを整理しておく。

1) 記述式課題の示し方や指導上の注意点について

日本文学と外国文学とを読み比べる場合は、日

本文学が外国文学から何を受け継いだり書き換えたりしたか（類似点と相違点）、及び受け継いだり書き換えたりした理由や効果について探究する課題を出す。

解答の際には、類似点と継承の理由や効果、相違点と改変の理由や効果についてそれぞれセットで記述するよう指導する。また、根拠となる類似点や相違点は複数あげた方が望ましいことを伝える。

考察と記述の時間に50分かけることを前提に「200字を超えること」という条件をつけ、時間配分に気をつけて時間内に書き切るよう指導する。この条件をクリアできなかった生徒には説明の仕方の基礎について別に指導する。

論旨不明の記述にならないように、他人が読んでもわかるよう自分の答案を見直したり、グループでの意見交流で互いの答案のわかりやすさを相互チェックするなどの時間を設ける。

2) 類似点と相違点について

同一箇所を類似点とみるか相違点とみるかで解釈が分かれる場合がある。比較作業を通して生徒から出された見解の相違については、必要な情報を適宜提示するなどして論理的な解決に導く手だてを取ることで、教室での議論のさらなる活性化を促進することができる。

3) 継承の理由や効果について

読み比べ活動では相違点に目が行きがちになるが、類似点も作者が先行作品のどこをどういう意図で継承したのかに関わる重要な問題である。両作品の違いばかりに着目せず、似ているところについても探すように指導する。その際、受容側が先行作品をどのレベルで継承しているのか——部分なのか大枠なのか——を確認させる。ちなみに、継承と創造の理解をねらいとする読み比べ活動を効果的に行うのであれば、大枠の類似している作品同士を取りあげるのが適切である。

継承の理由として〔作者の好み〕をあげるだけでは不十分である。そこで思考停止している生徒には、どこをどう継承しているのか、その動機やねらいは何かなどの問いを加えて、より深く考え

るように促す。

4) 改変の理由や効果について

改変の理由としてよく挙げられるのは「読者の同情・共感を誘うため」「読者に親近感や現実感をもたせるため」であるが、これは文化的に異なる外国文学との比較を通して、日本文学に対する相対的な近さを一読者として再認していることの表れである。受容側作品として日本の古典文学を選んだ場合、この再認行為には日本古典への親しみをもたらす効果が期待される。一方で、外国文化との距離感はある種の自国優位性、すなわちなショナリズムを助長する恐れがある。この点に注意しつつ、これを契機に自身の内側にナショナリズムが隠れ住んでいることをきちんと自覚することが肝要である。

思考が行き詰まっている生徒には、小学校から繰り返し学習している人物像や人物関係の把握を応用して、人物の性格や相互関係の相違点を探し出し、先行作品に対して人物像や人物関係にどのような奥行きや幅をもたせているかを考えるよう支援する。

5) 不十分な記述のパターンについて

誤読などの明かなミスを除けば、減点対象となる不十分な記述として、①類似点・相違点を示しているが、継承・改変した理由・効果の記述が無い、②継承・改変した理由・効果の説明が不十分である、③作品の歴史的背景や文学史的背景に関する知識が不足している、④比較対象が不適切であるの4パターンが見られた。①は出題意図の理解不足によるものなので適宜注意すれば済む。②はさらに、説明するとはどういうことかがわかっていない、あるいは説明するのに適切な語彙が使えないなど基礎力が不十分なレベルと、説明に具体性を欠いているや用語の使い方が不適切など応用レベルでの未熟さの2段階に分かれる。それぞれについて区別して指導する必要がある。③については、作品の歴史的背景に関して調べる能力と習慣を身につけさせたい。④については、話の構成や人物関係を構造的に把握・整理する作業を一手間加えることで防げるだろう。

注

- *1 記述式課題の答案について、変更後の規準に基づき採点した結果は、A評価—20人(27.0%)、B評価—43人(58.1%)、C評価—11人(14.9%)であった。おおむね妥当な成績分布であったと考える。
- *2 下定雅弘「長恨歌」の現在—「李夫人」との異同に着目しつつ—(『岡山大学文学部紀要』47, 2007.7)は、「長恨歌」の主題について、玄宗を批判する「諷論」にあるのか、玄宗と楊貴妃の「愛情」にあるのかで議論がなされてきたが、最近では「愛情」を主題とするのが学界の共通理解になっていると述べる。しかし、主題が「愛情」であることと玄宗への批判が含まれていることは別の問題である。王の寵愛が政治的混乱をもたらしたという出来事は間違いなく描かれており、愛ゆえに国を乱した王への批判意識を含ませながら、なおかつ王の深い「愛情」を主題化した作品として解釈することに問題はない。
- *3 『旧唐書』列伝・后妃上の玄宗楊貴妃条に「父の玄琰は、蜀州の司戸なり」とある。なお、楊貴妃の詳細な伝記は村山吉廣『楊貴妃—大唐帝国の栄華と滅亡—』(講談社, 2019)参照。
- *4 玉上琢彌は「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御」(源氏物語評釈別巻一『源氏物語研究』, 角川書店, 1966)で皇后に次ぐ貴妃の地位の高さは更衣の比ではないと述べるが、その解釈は採らない。
- *5 長瀬由美は、愛の深さへの共感を歌う「長恨歌」と玄宗の耽溺を批判する「長恨歌伝」とは筆致が異なるという下平雅弘「長恨歌」をどう読むか?—楊貴妃像の検討を中心に」(『岡山大学文学部紀要』2009.12)の見解を支持したうえで、「長恨歌伝」の

批判的筆致が地の文における桐壺帝への批判的視点の形象に影響を与えたと述べる(『源氏物語と平安朝漢文学』p.224-5, 勉誠出版, 2019)。したがって学術的に突き詰めれば、世間が天皇を批判する部分は「長恨歌伝」の影響下に書かれたものということになる。もちろん、「長恨歌伝」との比較は課題に含まれていないので、こうした見解は想定外として扱うことになる。

- *6 上野英二は、「長恨歌」が男を主体とする文章から始まるのに対して、『源氏物語』冒頭文は一人の女性の紹介に帰結することから女性の関心に沿う方向で書かれていると述べる。(『源氏物語と長恨歌 其九』『城国文学論集』41, 2019.3)
- *7 「前の世にも御契りや深かりけん」について、袴田光康は、「長恨歌」「長恨歌伝」にみえる輪廻転生譚的発想によって桐壺帝と桐壺更衣の前生譚への興味をかき立てるものと述べる(『源氏物語』における「長恨歌伝」の研究—「桐壺」巻篇其の二』『文芸研究』94, 2004.9)。比較対象とした「長恨歌」の範囲に輪廻転生は含まれないので、この生徒たちがそうした発想を「長恨歌」読み取ったとは思えないが、「長恨歌」それ自体を二人の前生譚とする解釈はたいへん興味深い。

【付記】本稿は科研費19K0275000(代表 井実充史)の成果の一部である。

本単元構想を開発するにあたっては、大堀真理子教諭と複数回の意見交換を行い、多くの実践的知見を得ることができた。また、授業実践及び記述式課題の答案の提供にもご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表す。

(2022年2月8日受理)

Development of story teaching materials to understand the relationship with foreign culture [Analysis]

IJITSU Michifumi

“COURSE OF STUDY for High Schools” states that understanding the relationship between Japanese and foreign cultures is more important than ever in today’s rapidly globalizing world. Based on that, we envisioned and put into practice a unit instruction comparing “源氏物語” and “長恨歌”. Specifically, we set up an task to summarize how 紫式部 was influenced by “長恨歌”. In this paper, we will clarify the outcomes and problems of this unit instruction by analyzing the answers of 74 students who performed this task.